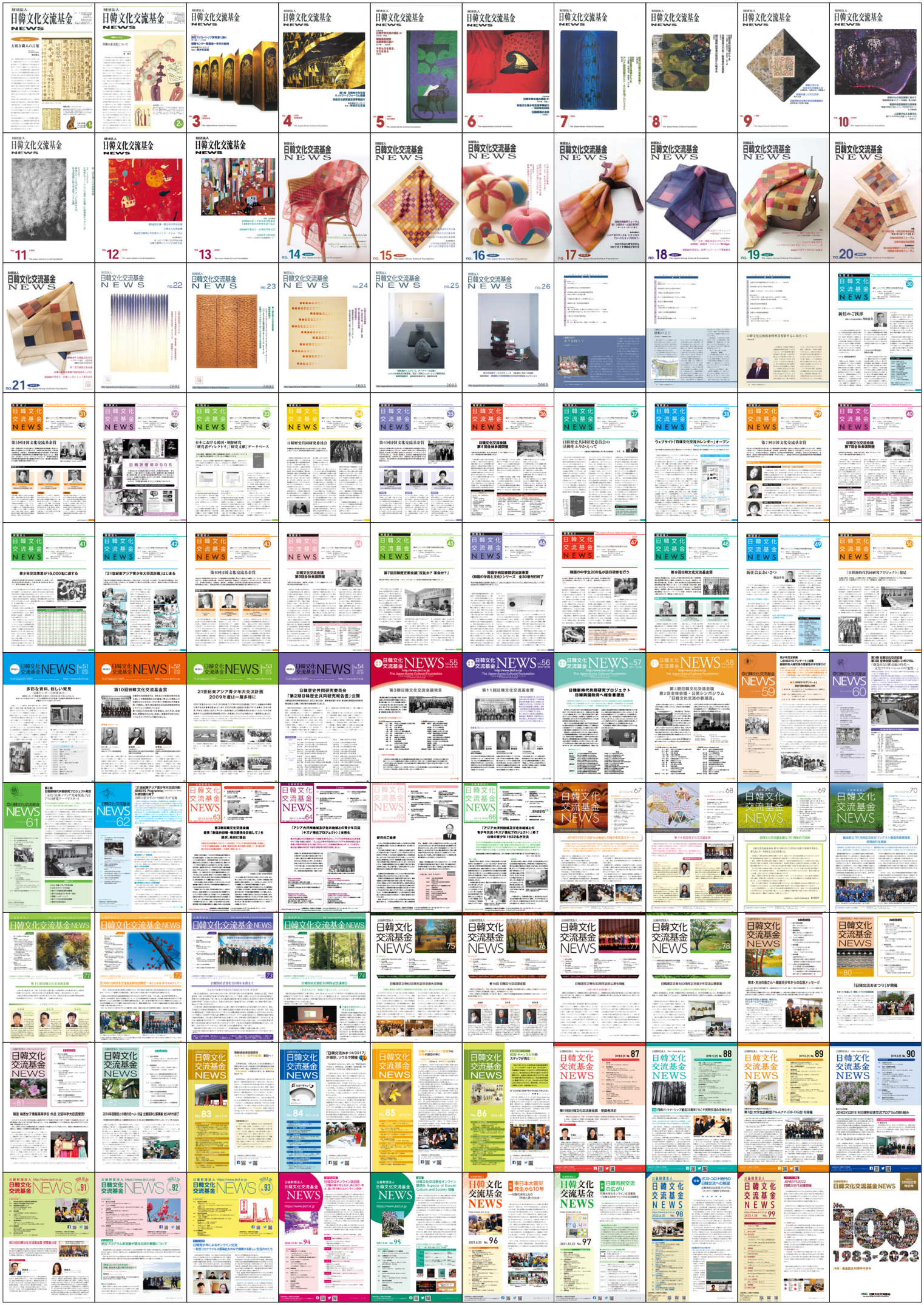
公益財団法人

日韓文化交流基金NEWS

2024.2.1
100回記念
特別号

特集　基金設立40周年の歩み

公益財団法人 日韓文化交流基金
THE JAPAN-KOREA CULTURAL FOUNDATION



創立40周年にあたって

公益財団法人
日韓文化交流基金
会長
古賀 信行

日韓文化交流基金は2023年12月15日に創立40周年を迎えました。

1983年の設立以来、「日韓両国国民間の相互理解と信頼関係の増進」という目的のもと、私どもは青少年交流事業をはじめ、各種の学術交流事業、文化交流事業を実施してまいりました。これらの事業を通じて相手国の方々と触れ合い、また相手国への知識を深められた方々の数は数万人にのぼります。

これら事業参加者の方々、また私どもの活動を見守り、ご支援を下さった皆様のおかげで、諸事業は成果をあげ、過去40年の間に日韓両国国民間の互いに対する知識、関心度が各段に向上してきたことに貢献できたものと自負いたしております。日韓両国、特に韓国の関係者の皆様に対しましては、厚い信頼及び緊密な協力のもとに活動を続けることができましたことに、心から御礼を申し上げます。

日韓文化交流基金は、人間で言えば40歳、不惑の年を迎えたわけですが、その言葉通り、時代時代によって大きく変動することもある両国間の政治外交的な関係に関わらず、当初の目的に向けさらに一歩一歩あゆみを進めてまいる所存です。

私どもの活動を広く世の中にお知らせしてきた「日韓文化交流基金NEWS」の刊行も今回でちょうど100回目を迎えましたので、過去40年間の活動を振り返る記念特集号として編集いたしました。

基金の歩んできた足跡にご関心をお寄せいただき、また今後の活動にも変わらぬご支援とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

Contents

3　創立40周年にあたって
公益財団法人日韓文化交流基金　会長　古賀 信行

4-5　40年のあゆみ

6　祝辞
韓日文化交流基金　会長　李相禹
駐日本国大韓民国特命全権大使　尹徳敏

7-10　インタビュー（フェロー・交流事業参加者・助成対象団体代表）
横浜国立大学大学院都市イノベーション学府・研究院　教授　朴祥美
獨協大学国際教養学部　言語文化学科　准教授　小宮 秀陵
IT企業勤務　金玟廷
古索高等学校　日本語教師　全賢浩
大邱大学　日本語日本学科助教授　竹下 知佳
外務省職員　重政 英彦
「MOON」代表　鈴木 良祐
第38回日韓学生会議　委員長　美濃又 花

11　活動報告
JKAF（Japan Korea Alumni Forum）
訪韓団OBOG組織
JKAF実行委員（社会人）　姜愛美

12-13　基金の歩みを振り返って ― 戸塚進也理事インタビュー

14-15　創立40周年記念事業の紹介
動画コンテスト「あなたに伝えたい 日本・韓国」開催
訪韓団・訪日団　参加経験者対象アンケート

16　青少年交流事業紹介
2023年度はホームステイを含めた本格的な青少年交流再開の元年!

17　助成事業紹介
①「百済25代武寧王生誕祭並びに没後1500年記念行事」（2023.6月）
②「立命館守山中学校中学生海外（公州市）派遣事業」（2023.6月）

18　会議事業
第23回日韓歴史家会議「歴史における戦争と文明」

19　フェロー研究紹介
「17～19世紀名古屋地域民の朝鮮認識 ―名古屋で流通した朝鮮関連書籍を中心に―」
西江大学研究教授　許芝銀

20-23　事業報告

公益財団法人
日韓文化交流基金

40年のあゆみ

日韓文化交流基金の創立40周年を記念して、1983年の誕生から2023年現在までのあゆみを振り返ります。

1983
財団法人日韓文化交流基金設立
（12月15日）

1985
助成事業 開始

1986

日韓・韓日合同学術会議 発足（～2001年度）

1989

日韓学術文化青少年交流事業 開始
教員・大学生等招へい・派遣事業、フェローシップ事業、日韓地域間交流促進のためのセミナー（～1999年度）

1995

日韓平和友好交流計画事業 開始
日韓共同研究フォーラム（～ 2004年度）、翻訳図書出版事業（～ 2008年度）、図書センター開館（～ 2011年度）

1998

日韓共同宣言
―21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ― 発表
中高生の交流事業開始(1999年度～)、日韓文化交流会議 発足(1999 ～ 2012年度)

1999

日韓文化交流基金賞 創設

2001
日本における韓国・朝鮮研究データベース事業（～ 2010年度）

日韓歴史家会議 発足

2002
日韓国民交流年

2002 FIFAワールドカップ（日韓共催大会）開催

日韓歴史共同研究委員会 発足（～ 2009年度）

1980 昭和55年 | 1985 昭和60年 | 1990 平成2年 | 1995 平成7年 | 2000 平成12年

2007

東アジア青少年大交流計画（JENESYS）開始

青少年交流事業の大幅拡充

2005

日韓友情年

日韓文化交流基金維持会員制度（現 賛助会員制度）開始

2012

公益財団法人へ移行

「キズナ強化プロジェクト」実施

東日本大震災の復興状況に対する理解促進を目的としたプログラム

2015

日韓国交正常化50周年

記念学術大会、記念公演「未来のために～歌でつづる日韓交流のあゆみ」、50周年記念青少年交流事業（公募：30件）

2022

年度後半よりオフライン交流（渡航を伴う対面交流）再開

2005 平成17年　2010 平成22年　2015 平成27年　2020 令和2年　2023 令和5年

2008

日韓新時代共同研究プロジェクト 発足（～ 2012年度）

2013

創立30周年

日韓文化交流シリーズ 実施（公演「えん～縁・演・宴～」、朗読会「ことばの調べに載せて」）、「日韓文化交流基金30周年史」刊行、作文コンテスト

2020

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、オンラインでの交流事業を開始

2023

創立40周年

動画コンテスト「あなたに伝えたい 日本・韓国」、訪韓団・訪日団参加経験者対象アンケート

これまでの実績

42,209人（大学生等の招へい・派遣）

784人（フェローシップ 招へい・派遣）

1,419事業（草の根交流等への助成）

※1989年度以降、2023年12月末までの実績（助成のみ1985年度以降）

祝辞

韓日文化交流基金
会長
李相禹
（イ・サンウ）

日韓文化交流基金の創立40周年をお祝い申し上げます。

また、基金を率いてこられた歴代会長、理事長をはじめとする役員の皆様、職員の皆様のご努力に敬意を表します。

21世紀のグローバル・ビレッジの国際環境の下、国と国との関係は外交官によってではなく、国民間の相互理解と交流・協力が土台となり、決まっていくことになります。

このような時代の潮流に備えるため、両国政府の合意に基づき、韓日両国国民間の相互理解の促進及び交流協力支援を進める機関として韓日文化交流基金と日韓文化交流基金が創設されてから40年になります。

その後、両基金は多くの事業を実施して参りました。例えば、歴史の中で両国が互いに何を学び合ってきたかを大きなテーマとする韓日・日韓合同学術会議を20回以上開催しました。他にも研究者、芸術家、マスコミ関係者等の対話、学生交流等も実施しました。

人は「出会い」から「学び」を得ます。韓国人と日本人は何千年もの間、隣人として暮らしながら多くの出会いを繰り返し、互いに学びを得てきました。

このような出会いと学びをより効果的なものとし、さらに緊密な関係を築いていくため、韓日・日韓両基金はこれまで足りなかった点を補いながら、また過去の歴史を直視しながら、引き続き努力して参ります。

過去の40年を振り返りつつ、これからの40年の間に韓日両国国民がより意味のある出会いと学びの機会を得ることを期待しております。

最後にもう一度、日韓文化交流基金の益々のご発展と、役職員の皆様のご健勝をお祈り申し上げ、祝辞といたします。

駐日本国大韓民国
特命全権大使
尹徳敏
（ユン・ドクミン）

日韓文化交流基金創立40周年を心よりお祝い申し上げます。

古賀信行会長、鹿取克章理事長をはじめとする日韓文化交流基金の役職員の皆様のこれまでのご尽力に心から感謝申し上げます。

貴基金は、1965年の国交正常化以降15年を過ぎても限定的であった韓日両国間の交流を積極的に活性化し、両国国民間の相互認識を改善していくために設立されたわけですが、このような設立の趣旨の下、貴基金はその時々の韓日関係の状況に関わらず、交流増進のため貢献されてきました。

2023年3月の尹錫悦大統領の訪日と岸田総理の訪韓によりシャトル外交が再開する等両国政府間各分野の対話が活性化し、また、2023年上半期に両国を訪問した外国人のうち、日本人、韓国人がそれぞれ1位を占めるなど、人的交流も活発です。韓国ドラマやK-POP、韓国料理等が日本で大きな人気を集め、韓国では日本のアニメやビールが人気を呼ぶ等、文化的な親密度がこれまでになく高まっています。

今年（2023年）は1998年に金大中大統領と小渕総理が「韓日パートナーシップ宣言」を発表して25周年になる年でもあります。同宣言により両国の大衆文化が相手国で身近なものとなり、両国国民間の相互理解深化のきっかけとなったように、シャトル外交復活等の一連の流れは、韓日交流の新しい転換期であり、両国関係をさらに発展させるための絶好の機会と言えるでしょう。

多様な事業を実施して来られた日韓文化交流基金が、引き続き両国関係進展のためにご尽力されることを切に願う次第です。

両国国民の直接の出会いと対話を通じ、韓日関係が新しい次元に発展していくことを確信しております。

インタビュー

フェロー・交流事業参加者・助成対象団体代表

これまでの事業を通じて当基金がご縁を結んだ方々に、当時の思い出や基金へ期待することなどを伺いました。

フェロー

Q1. 現在のお仕事
Q2. 基金フェロー時代の思い出・エピソード
Q3. これからの日韓関係に期待すること、当基金に期待すること

A1. 学部生、大学院生、留学生を指導しています。専門は近現代の日本と東アジア関係史です。戦前戦後の日本における、演劇・舞踊などのパフォーマンスを通した文化外交および文化振興、対植民地文化政策を研究しています。

A2. 東京大学情報学環の吉見俊哉研究室でフェローとして過ごした1年は、私の研究生活においてとても充実した期間でした。貴重な資料発掘やたくさんの方々へのインタビューを通して刺激を受け、研究に集中することのできた時間でした。調査に出かける時以外は院生室の一角を占領し論文作成作業に取り組みましたが、アメリカ在住時は学生たちがよくキャンパス内をジャージ姿で闊歩し、図書館と教室を出入りすることが多かったのでそれに慣れてしまい、私もその後東大内で同じような恰好で出歩いていました。後日、友人から聞いた話ですが、映画「キル・ビル」の登場人物みたいな恰好だったらしく、とても恥ずかしく思いました。今ではそれもよい思い出ですが。

A3. 真摯に研究できるよう支援していただきましたこと、何より私の研究を信頼していただきましたことに深くお礼申し上げます。私は学生時代に日韓学生フォーラムに参加したことがあります。2023年8月、テレビ朝日でこのフォーラムが4年ぶりに対面で開かれたとの報道がありました。久しぶりにOBOGとLINE上で思い出話に盛り上がりました。基金の活動は文化学術交流の積み重ねにつながり、それが日韓関係の更なる発展に役立つと思います。

東大・吉見研究室のゼミ生たちと
（後列左から2番目が本人）

写真　白浜哲

横浜国立大学大学院
都市イノベーション学府・
研究院
教授

朴祥美

（2004年度訪日フェロー）

パク・サンミ：Ph.D.（米プリンストン大学大学院）。米マサチューセッツ工科大学、早稲田大学、東京大学を経て現職。

A1. 専門は韓国古代史です。現在は国際教養学部言語文化学科に所属しており、現代世界の問題や韓国地域研究とも向き合いつつ、過去と現代の関係性について考えることを大事にしています。

A2. 私は大学生訪韓団団員として韓国に行ったことがきっかけで日韓文化交流基金とのご縁が生まれました。のちに訪韓フェローとしても韓国に滞在し、その際にも多くの韓国の研究者と交流がありました。交流からは、対話を通じて歴史の描き方に対して多くの学びを得ることができます。私個人の交流は、今では研究者以外にも広がりをみせています。最近は、韓国からの訪日団の受入など学生・教職員が一体となって交流授業を企画・実施する機会もありました。自分が学生として韓国に行った経験や訪韓フェローの時に得た交流の経験をもとに、今の時代にそった交流のありかたを考える重要性を日々実感しています。

A3. 日韓関係は時々刻々と変化し、それにともなって、交流のかたちも多様化しています。オンライン・オフラインといった交流の方式、そして団体や地域の枠組みが様々に変化していますし、日韓以外の国や地域も含めた交流もより切実に求められていると思います。これまで様々な交流に対して柔軟に先導していただいたことを感謝し、また今後の発展を祈念しております。

訪日団受け入れ時の様子
（獨協大学提供）

獨協大学国際教養学部
言語文化学科　准教授

小宮 秀陵

（2012年度訪韓フェロー）

こみや ひでたか：ソウル大学で博士号取得。啓明大学校招聘助教授、獨協大学国際教養学部言語文化学科専任講師を経て現職。

交流事業参加者

Q1. 現在のお仕事
Q2. プログラム参加時の思い出・エピソード
Q3. これからの日韓関係に期待すること、当基金に期待すること

A1. 企業ブランディング企画担当（現在は育児休暇中）

A2. 私の人生初の日本訪問でしたので、すべてが新しく、楽しかったです。街並みとそこを行きかう人々を眺めつつ、看板に書かれた日本語を読むことでさえ私にはその一つ一つが学びとなりました。その記憶は今でも鮮明で、中でも松山でのホームステイが特に印象に残っています。

日本の家庭にお邪魔して畳の部屋で寝泊まりし、お風呂にも入っておばあちゃんと一緒に巻き寿司も作る…日本人には至極平凡で当たり前かもしれませんが、外国人としては日本文化を存分に堪能したすばらしい経験でした。

あのときの9泊10日間は、本当に充実した時間となりました。貴重な経験をさせていただいたことに、改めて感謝の意を伝えたいです。

A3. 政治や歴史的な枠組みだけでそれぞれの国と人を見るのではなく、良いことは率直に認め、個人には個人として向き合い、お互いの文化や言語などを気楽に楽しめる関係が今後も続いてほしいです。基金には訪日団のように日本や日本語に関心を持つ人々が日本を体験する機会を今後もたくさん設けていただきたいです。

高校生訪日団参加時の様子（左から4番目）

IT企業勤務（日本在住）
金玟廷
（2008年度訪日事業参加）

キム・ミンジョン：日本語弁論大会入賞がきっかけでJENESYS訪日団に参加。大学では日本地域学を専攻。卒業後、東京で就職し、以来日本在住9年目。

A1. 前任の中学校で3年間勤務の後、現在は京畿道水原市にある古索高等学校で勤務しています。現在2年目。

A2. 訪日団には2度参加しました。最初は大学生として、そして今回は高校生団の引率として参加しましたが、偶然にも、2度とも長野県飯田市を訪問しました。1回目の訪日で私自身もホームステイを体験し、楽しかったことが思い出されて感慨深いものがありました。

当時、ホストのお父さんと竹を切り出し、ご飯を炊いて食べたり、流しそうめんを食べたりして、日本の様々な文化を体験したことがまるで昨日のことのようです。先に体験していた私が今回引率した高校生たちに多くのアドバイスや思い出話をすることが出来たことで、かけがえのない時間となりましたし、生徒たちも私と同じような経験が出来たので、楽しい思い出を共有することが出来ました。

A3. 日本語教師になった今も、訪日団の経験を通じて感じた日本の魅力を授業時間に生徒たちに伝えています。今後も韓国と日本は民間レベルの交流を続け、お互いの文化を理解する必要があると思います。日韓文化交流基金が取り組んでいる事業が今後も続き、学生の交流をスタートとして、今後の日韓関係がより肯定的に築かれていくことを願っています。

2023年夏の訪日団で引率した高校生たちと

（韓国）古索高等学校
日本語教師
全賢浩
（2016年度訪日事業参加）

ジョン・ヒョンホ：韓国・京畿大学日語日文学科卒。2016年大学生訪日団（団員）、2023年7月青年訪日団（引率）として参加。

A1.　助教授として韓国人学生に日本語を教えています。日本や日本語に興味のある学生への授業は責任も伴いますが気づきも多く、私自身も日々成長させてもらっています。

A2.　私が大学生訪韓団のメンバーとして韓国を訪れた2001年は、日韓関係においてまだお互いを「近くて遠い」と表現するような時期でしたが、私自身、大学で韓国関連の授業を受講していたため、それなりの知識はあると自負していました。ところが、実際に見て、聞いて、触れた韓国は、色々な意味で私の「知っている」を打ち破ってくれました。西大門刑務所歴史館やDMZで見聞きしたこと、実際に肌で感じたその場の空気。ワールドカップ競技場で出会ったご年配のボランティアの方との会話。何気ない事でも、いざ現実のものとして目の前に突き付けられると、机上の知識としてあったものが全く知らなかったことのように感じられ、様々なところで自分の視野の狭さを痛感しました。その衝撃は今も心に残っており、自分の視野を狭めないための戒めになっています。

A3.　日本と韓国の関係は、様々な要因によってすぐ良くもなり悪くもなる、揺らぎやすいもののように見られがちです。しかし、私の教えている学生らの交流を見ると、サブカルチャーなどを入り口に互いが互いを尊重し、揺らぐことのない友好的な関係が築かれているように思います。日韓文化交流基金には今後、若い世代だけでなく、様々な世代や立場の人が活発に交流し、視野を広げられるような場を設けていただければと思います。

「衝撃」のひとつ、板門店の「帰らざる橋」

（韓国）大邱大学
日本語日本学科助教授
竹下 知佳
（2001年度訪韓事業参加）

たけした ちか：大学生訪韓団参加の翌年、韓国に交換留学。大学卒業後は韓国関連企業に就職、その後韓国で大学院に進学し、現職。

A1.　研修のため、米国に2年間留学させていただくことになり、2023年8月からハーバード大学大学院に在籍しています。米国の教育政策について研究する傍ら、東アジアの歴史や法制度に関する講義も受講しています。

A2.　私が2018年3月に参加した大学生訪韓団は、ソウル・釜山をはじめ計6つの都市を巡り、主に韓国の近現代史に関連する施設を見学しました。近現代史は大学でも学んでいましたが、現地に赴いて初めて知れることや感じられることが非常に多かったです。また、訪問した都市では、韓国人学生たちと率直な意見交換をする機会にも恵まれました。その中で感じたのは、日韓の間には歴史的に様々な誤解やすれ違いが生じてきたものの、その多くは、両国の国民が粘り強く対話を続けることで、次第に克服できるのではないかということでした。私が外務省に入って日韓関係に携わりたいと考えるようになったのは、訪韓団での貴重な学びや出会いがきっかけです。

A3.　国際社会に山積する様々な課題の中には、日韓両国が共に手を携えて取り組むべきものが数多くあると感じています。日韓関係が単なる二国間関係の枠を超えて、国際社会の舞台で協力していけるグローバルパートナーに発展していくことを期待しています。また、現在の日韓関係を下支えしているのが文化交流や人的交流です。それらを担う日韓文化交流基金の役割も、今後一層重要になっていくと考えています。

※本稿には個人的見解が含まれていますが、当該見解は個人の見解であり、所属組織の見解を示すものではないことを予め申し添えます。

外務省職員
重政 英彦
（2017年度訪韓事業参加）

しげまさ ひでひこ：2021年外務省入省。日韓関係を担当する部署で2年間勤務の後、現在に至る。

助成対象団体代表

Q1. 団体について
Q2. 助成対象事業の概要など
Q3. これからの日韓関係に期待すること、当基金に期待すること

A1. MOONはオフラインでの日韓交流が難しかった2020年に発足。日韓で新しいことに挑戦する人を応援すべく、気軽にオンライン/オフラインで交流できる、ポジティブな日韓交流の場を提供しています。

A2. MOONにとってはじめてのオフラインイベント「もっと、ずっと、日本と韓国を好きになる」をご支援いただきました。日韓の若者100人が東京に集いました。日韓両国に深くかかわるパネラーのお話を聞くパネルディスカッションや、参加者同士がお互いの日韓の「好き」を通してつながるワークショップを通じ、日韓の若い世代が自分の好きな活動や趣味でつながりを持つことができました。今回のイベントを皮切りに、日韓の若者がつながれるオンラインプラットフォームを提供するとともに、開催地を韓国や日本の各地域にも展開したいと考えています。

A3. 現在の日韓の若い世代のほとんどは、ドラマや、アイドル、食文化など、ポジティブなイメージを入口に日本と韓国を認識しています。こういったライトなタッチポイントから両国を知った人たちが、画面の中で日韓文化を消費するにとどまらず、友人をつくったり、実際に両国を訪れてそこにいる人と交流したりするなど、もう一歩踏み出すきっかけづくりを提供してくださることを、今後の日韓交流、そして日韓文化交流基金に期待しております。

2023年2月に東京で開かれたイベントの様子

「MOON」代表
鈴木 良祐

基金創立40周年プレ企画「ポストコロナの日韓交流～新しい世界をめざして～」対象事業（2022年度）

すずき りょうすけ：内閣府主催の国際交流事業に参加し韓国の友人ができる。ベンチャー企業勤務の傍ら交流を盛り上げるためMOONを設立。

A1. 日韓学生会議は、日韓の学生が対話を通して相互理解を深めるインターカレッジの国際交流系学生団体です。週1回の定例会に加え韓国の姉妹団体である韓日学生会議（KJSC）と夏季交流大会を毎年開催し、議論や文化交流を通し友好な関係を築いています。

A2. 私たち学生会議の夏季交流大会は、毎年日韓交互に一週間程の合宿形式で開催しています。日韓文化交流基金にはこれまで日本開催年に支援をいただいており、第1回は1986年にまでさかのぼります。これまでのご支援に感謝申し上げます。私たちは38回大会のメンバーですが、これまで参加した先輩方は日本と韓国はもちろん、世界の様々な方面で活躍されています。現在は39回大会の新メンバーたちが2024年夏の大会に向けて活動中で、今後は韓日学生会議（KJSC）との交流回数をさらに増やし、より一層の相互理解増進に資するべく、そして私たち学生会議が40回、50回と永く続くようメンバー一同、力を合わせて努力したいと考えています。

A3. 昨年来、両国の関係が好転しつつあると感じています。若者の文化交流は活発だと思いますし、お互いの国の商品をお店で見かけることも多くなりました。一方でまだ相手の国に良くない印象を持っている人もいます。相手国の悪い印象をなくすことができるように活動をするのが日韓交流団体だと考えます。日韓文化交流基金には今後も私たちのような草の根交流を後押ししてほしいと思います。

2023年夏の大会（ソウル開催）にて

第38回日韓学生会議
委員長
美濃又 花

人物交流助成対象事業（2022年度ほか）

みのまた はな：中学3年生の時にK-POPを好きになる。韓国人の友達を得たいと思い、当団体に所属。3年目に委員長に就任。

ACTIVITY REPORT
活動報告

JKAF(Japan Korea Alumni Forum) 訪韓団OBOG組織

JKAF実行委員（社会人） 姜愛美

日韓交流おまつり2023 in Tokyo「韓国の若者と話そう」ブース運営

9月30日、10月1日にわたり、駒沢オリンピック公園で開催された「日韓交流おまつり2023 in Tokyo」にて、韓国から来日した韓国青年訪日団（第3団）団員8名とJKAFメンバー22名で「韓国の若者と話そう」ブースを運営しました。

「日韓交流おまつり in Tokyo」がオフラインで開催されるのは2019年以来、4年ぶりの対面ブース運営ということもあり、JKAF実行委員の13名を中心に、約3ヶ月前からブースの内容や当日参加メンバーの募集などの準備を行いました。

来場者に韓国人のライフスタイルや考え方への理解を深めてもらうきっかけとすること、また訪日団団員たちに多様な世代の日本人との日韓交流を体験してもらい、その体験を帰国後に広く発信してもらうことを目的にブースを運営しました。

11時半から最終の17時半の回まで両日とも6回（1回あたり約40分間）、2グループにわかれて実施しました。まず自己紹介を行った後、来場者の方から韓国に関して興味のあるトピックについて話したり訪日団団員に質問したりしながら自由に話しました。

中には、韓国語で話したい方、韓国語を習っている方が集まったため、最初から最後まで韓国語で進行したグループもありました。

来場者からは韓国の食文化、おすすめの観光地、受験事情、就職活動、韓国語をどのように勉強すればよいかなど多岐にわたる質問が投げかけられました。日本語を流暢に話す訪日団団員に、どのように日本語を学んだのか質問する来場者もいました。

日本でもブームになっている韓国ドラマについての話題では演技の勉強をしたいという来場者から「韓国と日本の演技の違い」について質問があり、これに対して団員は、韓国では4年制の大学で演技を学び俳優になるケースが多いと答えていました。

各回の終わりに参加者の皆さんから感想メッセージをいただきました。感想メッセージを書いた付箋をブースの壁に貼ってもらいましたが、回を重ねるごとに付箋が増え、ブースの壁が彩られていきました。

「韓国の食事や有名な場所について話し合ったので、次に韓国に行った時にぜひトライしてみたいです」、「映画・音楽の話をきっかけに、社会的な問題や文化、風習など幅広く話すことができ、有意義な時間でした」、「久しぶりに韓国語を話せて楽しかったです」など、さまざまな感想が寄せられました。

最終的に2日間全12回で、延べ102名の参加がありました。「日韓交流おまつり in Tokyo」という最大規模の日韓交流行事に、2019年以来2度目のブース出展が叶い、大変光栄でした。

最後に、ブース出展にご尽力いただいた公益財団法人日韓交流文化基金様がこのたび40周年を迎えられること、心よりお慶び申し上げます。貴基金が主催する日本大学生訪韓団のOBOGとして今後も日韓の市民が交流する機会の創出に尽力して参りますので、引き続きご協力をいただければ幸いです。この度は本当におめでとうございます。

さまざまなことを語り合いました

来場者の皆さんからいただいたメッセージ

基金の歩みを振り返って

戸塚進也理事インタビュー

日韓文化交流基金は1983年12月15日に設立されました。同じ時期に韓国では「韓日文化交流基金」が誕生しましたが、80年代初頭の両基金の立ち上げに準備段階から関わり、設立以来現在に至るまで理事として基金の活動を見守ってこられた戸塚進也さんにお話を伺いました。

戸塚 進也　とつか しんや：1940年　静岡県生まれ。通商産業省勤務、㈱平喜百貨店勤務、掛川市議会議員、静岡県議会議員を経て1974年参議院議員当選（2期）、1983年衆議院議員当選（3期）。2005年より掛川市長（2009年まで）。1983年から現在まで日韓文化交流基金理事。

戸塚理事には、国会議員在任時に基金の設立に関わられたわけですが、まず、政治家を志したきっかけ、基金の設立に関わった経緯等についてお聞かせください。

この話をするのは初めてですが、実は自分は子供の頃医師になりたかったんですよ。試験で失敗して夢は叶わなかったわけですが、その後、家業の酒問屋の手伝いをしていた時期に商店街の組合の世話役を任されたことがきっかけとなり市議会議員選挙に出馬して当選、政治家の道を歩むことになりました。まあ、医師も政治家も、広く人々・社会のために働く、という点で共通点があると言えるかもしれませんね。

私は、日韓関係はもちろん、中国、北朝鮮との交流活動にも力を注いできました。先の大戦中に日本はアジアの国々に多大な迷惑をかけましたが、未来には二度とそのようなことがあってはならないという思いから、アジアの国々との友好協力関係の推進は、自分の議員生活を通してのライフワークのつもりで取り組んできました。

基金の設立に関わることになったのは、私が日韓・韓日議員連盟で社会文化委員長を務めていたことが直接のきっかけです。

基金設立の背景やエピソードについてお話いただけますでしょうか。

日韓・韓日議員連盟は1970年代から活動を始め、私が参加した時には故福田赳夫元総理が第二代会長を務めておられ、自分はその下で社会文化委員会委員長と運営委員会委員長を仰せつかっていました。長年会長として在任した福田元総理が辞意を固められ、後任の会長の人選を進める際には有力候補であった故竹下登元総理と福田会長との連絡役として自分が動いて回った記憶があります。

日韓・韓日文化交流基金の設立に向けた動きは、故竹下元総理が日韓議連会長でいらっしゃった1980年代の初頭から始まりました。自分はその時も日韓議員連盟の社会文化委員会委員長の職にありました。両国の間で1965年に国交が結ばれてから既に15年以上が経っていたわけですが、国民同士が直接交流する機会も、政治以外の情報に接する機会もほとんどなく、今から考えると信じられませんが、それこそ「近くて遠い国」という表現そのままの状況にありました。

戸塚理事（右端）と李大淳韓日文化交流基金理事（左端）。中央は花村仁八郎　第二代日韓文化交流基金会長。（1994年8月、第11回基金代表訪韓団参加時）

そのような中で、「日韓両国国民間の相互理解と友好を促進するためには、次代を担う青少年の交流や、学術交流事業の実施を担う民間の専門機関の創設が必要」という考えの下、韓国側で自分のカウンターパートであった李大淳（イ・デスン）社会文化委員会委員長（現韓日文化交流基金理事）と李道先（イ・ドソン）副委員長から私にご提案をいただきました。これを受けて日本側でも内々に検討を進めていた1980年の夏のことだったと思いますが、李大淳さんと李道先さんからの紹介で大統領に就任する直前の全斗煥氏（チョン・ドゥファン：当時国家保衛非常対策委員会委員長）を訪ねて協力を要請し、賛意を得たことで基金設立の動きに弾みがつきました。

その後、1981年9月に開催された日韓・韓日議員連

盟の合同総会において「基金」創設を進めていくことが合意されました。翌1982年には日本の歴史教科書の記述をめぐっての「教科書問題」が発生して両国関係が緊張しましたが、かえってこれが文化交流基金創設の動きを後押しすることにもつながった面もあると思います。両国国民間の相互理解の必要性があらためて浮き彫りになったわけですから。

肝心の基金創設のための寄付金集めですが、韓国側では大統領府からの働きかけもあり、すぐさま財界から10億ウォンの寄付が集まったのに比べ、日本側では大変苦労しました。経済界からの理解と協力を得るために、当時日韓議員連盟の会長だった故竹下元総理の指示を受けて故瀬島龍三氏（当時日本商工会議所特別顧問）に相談し、同氏の紹介で当時の経団連の稲山嘉寛会長、花村仁八郎副会長（いずれも故人；花村副会長は後に日韓文化交流基金の第二代会長に就任）にご相談に伺いました。ご検討いただく過程で、1983年の夏には私がご案内する形で花村副会長に韓国を訪問していただきました。全斗煥大統領や韓国経済界を代表する方々にお会いになった花村副会長は、「日韓・韓日文化交流基金」の設立に対する各界からの期待を実感され、その結果、経団連が各経済団体に対する募金活動に乗り出してくれることになりました。このような苦労を経てようやく1983年11月17日に「日韓文化交流基金発起人総会」を開催するに至ったわけです。

このような一連の状況の下、国内の経済団体の方々に日韓間の文化交流の重要性を再認識していただくきっかけとなったのが、現在まで続いている「日韓文化交流基金代表訪韓団」です。基金発足と同時に副会長にご就任くださった故花村仁八郎経団連副会長を団長とし、各団体の役員の方々が参加して「訪韓団」を編成、1984年5月に派遣しました。参加された皆様に当時めざましい経済成長を遂げつつあった韓国のありのままの姿を目にしていただいたことで、文化交流活動を推進する団体の重要性に一層のご理解を得ることが出来ました。その後も寄付金は着実に増え続け、最終的には4億1,100万円が集まりました。このようにして基金の土台が固まっていったわけです。

花村仁八郎副会長（当時）と戸塚理事（1985年8月の第2回基金代表訪韓団参加時：ソウルオリンピックスタジアム視察）

その後40年が経ちました。私は今年83歳※ですので、人生の半分を日韓文化交流基金と共に過ごしたことになります。自分でいうのも何ですが「生き証人」ですね。

※2023年（インタビュー当時）

今後の基金の活動についてご意見をいただけますでしょうか。

例えば「日韓文化交流基金賞」は、両国間交流に貢献のあったある程度の経歴・年齢の方々を表彰する事業ですが、既に20回を数えたこともあるし、もっと若い人たちにスポットを当てていくことを考えるのも一つではないかと思いますよ。

日韓文化交流基金は、その後、日本政府からの委託を受けて各種の青少年交流事業、学術文化交流事業を大規模に実施してきました。まさに設立時に掲げていた目標を果たし、地道に成果を挙げてきているわけですが、韓国側のカウンターパート機関である韓日文化交流基金とも、あらためて合同で事業を行うことが出来ればいいですね。

10年後に迎える日韓・韓日文化交流基金創立50周年の記念行事に、両基金の設立準備段階からのカウンターパートである韓日基金の李大淳理事と共に参加することが出来れば、これにまさる喜びはありません。

2002年8月の第18回基金代表訪韓団参加時：韓日親善協会中央会表敬（前列中央が金守漢（キム・スハン）会長、後列右から3番目から李大淳理事、4番目が戸塚理事）

2005年8月の第21回基金代表訪韓団参加時：李大淳理事と

❶ 動画コンテスト「あなたに伝えたい 日本・韓国」開催

創立40周年記念事業として、日韓交流に関わる動画を広く募集しました。

〈募集テーマ〉
（1）あなたに伝えたい日本の魅力
（2）あなたに伝えたい韓国の魅力
（3）あなたに伝えたい日韓の友情

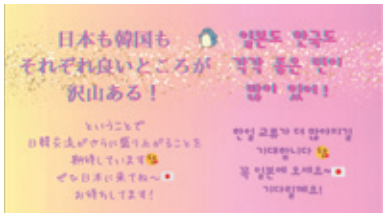
入賞作品の中から最優秀賞作品を紹介します。

最優秀賞 中学生・高校生部門

呉瑞允（オ・ソウユン）さん

作品名 日本に住む韓国人高校生のリアル

コメント 普段なかなか見ることのできない日本に住む韓国人高校生の生活を、ぜひご覧ください！日本語・韓国語の字幕付きです！



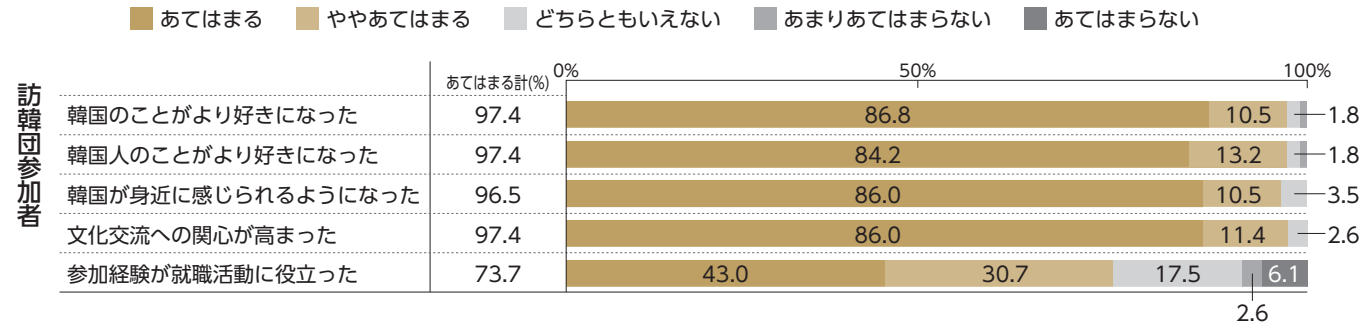
❷ 訪韓団・訪日団 参加経験者対象アンケート

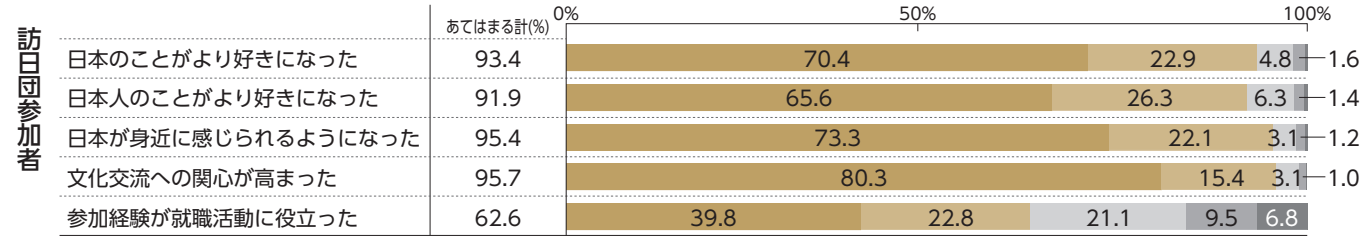
当基金の代表的な事業である青少年交流事業（JENESYSプログラム）について、今後のより効果的な事業運営のための知見を得ることを目的に、参加経験者を対象にアンケートを実施しました。ここでは結果の一部についてご紹介します。（回答結果全般については基金ウェブサイトでご紹介しています）

紹介ページはこちら

調査方法：インターネット調査（ホスティング）
対象者：2013年度-2022年度実施の訪韓団・訪日団の参加者のうち、【日本】参加当時大学生だった479名、【韓国】参加当時高校生・大学生だった2,588名
回収数：【日本】114名（24%）、【韓国】768名（30%）
調査期間：2023.9.1-30
調査機関：株式会社インテージリサーチ

■【訪韓団（訪日団）】に参加して、以下のことに変化はありましたか。





両国とも９割以上の人が訪問国のことや人が好きになり、身近に感じられたと回答。文化交流への関心も９割以上。

作品はこちらで御覧になれます

最優秀賞 大学生部門

李池媛（イ・ジウォン）さん

作品名 今年、私たちの夏

コメント 友人たちと訪れた日本で感じたことを、雰囲気や名所、文化の紹介を通じて映像に残したいと思いました。動画をご覧の皆さんにも日本の魅力とともにお伝えできればと思います。

最優秀賞 一般部門

小野 光洋さん

作品名 Lovers

コメント 韓国と日本の恋愛文化の違いをテーマに作った作品です。映画製作サークルにたまたま今年韓国人留学生が２人入ってきて、彼らとの雑談の中から生まれた作品です。

■日韓両国国民がさらに良く知り合うためには、どのようなプログラムが必要か。

日本側（訪韓国参加者）

- 視察プログラムだけでなく、特定の共同プロジェクトの達成をコアにしたプロジェクトや、そのほかにもOB・OGによる日韓カフェ運営など、特定の目標を掲げた「卒業生組織」があったら面白いのでは。
- 社会人になっても参加できるようなプログラム。1回参加して終わりではなくその経験を踏まえて、それぞれの立場や環境でできる交流方法を模索しては。
- 文化面だけでなくビジネス面でどのように関わり合っているのかを知るプログラム。

韓国側（訪日国参加者）

- 両国が学校で習った歴史の授業はどうだったか、お互いが目指す平和とは何か、これからもお互いを理解するためには両国がどのような配慮と理解が必要なのか、率直に話し合う時間。
- 美容に関連した学習プログラム。日本でK-popが流行し、韓国の美容に興味を持つ日本人女性が増えているので。
- 相手国の文化を体験できるプログラムをもっと増やしてほしい。村のおまつりや体育大会に参加する、など。

■日韓文化交流基金に期待すること。

日本側（訪韓国参加者）

- 基金のプログラムで、相手国や人への興味へ繋がっていく学生たちが増えてほしい。メディアの情報ではなく、ひとりひとりの体験が最も正しい情報であるのでぜひその機会をこれからも提供し続けてほしい。
- 平和への貢献の仕方はたくさんあり、私は日韓交流という方法は選びませんでしたが、自分なりに貢献できる方法は何か、考えるきっかけをいただいたことに感謝しています。ぜひ、活動を続けていただきたい。
- 在日コリアンとして日韓関係が良くなることを願ってやみません。これからも日韓交流の架け橋になっていただければと思う。

韓国側（訪日国参加者）

- 現在日本在住で、多くの日本人と会っていますが、一人の日本人の周りに一人の韓国人がいるだけでも、韓国に対する好感度や理解度が高まることを毎回経験しています。直接的な人間関係を持たなくても会話をすることでマイナスイメージが一部解消される状況をたくさん経験してきましたので、訪日団は単なる一つの交流プログラムではなく、両国の未来のために価値あるプログラムだと思う。
- OB・OGとして、訪日団プログラムの魅力を大学生・高校生に伝える機会があれば参加したいです。また韓国での日本イメージ向上のために、様々なプログラムに取り組んでいただければと思う。
- 訪日団参加経験者間のネットワークが継続的に形成・維持されるよう、今後も積極的な役割を果たしてほしい。

2023年度はホームステイを含めた本格的な青少年交流再開の元年！

ー「韓国青年訪日団（第３団）」（９月21日～ 10月５日）の活動紹介 ー

2020年２月実施の訪日団を最後にコロナ禍で中断を余儀なくされた青少年の対面交流は、水際対策の緩和と共に2022年９月から段階的に再開し、今年度に入ってからはホームステイも含めた本格的な再開となりました。

また各訪問先においても、当基金の事業がきっかけで本格的な国際交流を再開することになった自治体、大学等の各協力機関も多く、互いに交流再開の喜びを分かちあう１年でもありました。特に各地で実施されたホームステイでは温かく迎え入れていただきました。

2023年度の交流規模は訪日団500名、訪韓団190名の計690名で、団ごとにテーマとして５月に開催されたG７広島サミット、ポストコロナの新たな社会の動きや世界的な課題であるSDGs、サステナブルツーリズム、日韓共通の課題である少子高齢化や異常気象への備え等を掲げ、多種多様なプログラムを立案しました。

ここでは「日韓交流おまつり2023 in Tokyo」ブース運営と取材ならびに少子高齢化やポストコロナの地域活性化事例視察をテーマとした韓国青年訪日団第３団の様子を紹介します。メンバーは在韓国日本大使館選抜の青年で構成されており、「今」の日本を取材し発信することをミッションとしています。

日程前半では９月30日と10月１日の２日間、駒沢オリンピック公園で４年ぶりに対面で実施された「日韓交流おまつり」において、JKAF（大学生訪韓団OBOG組織）のメンバーと「韓国の若者と話そう」ブースを運営しました。２日間で約100名の来場者と団員が韓国ドラマやK-POPはもちろん、互いの文化について紹介し合う等、様々な話題で盛り上がりました。時には大きな笑い声も聞こえ、笑顔で語り合う様子が印象的でした。

韓国青年訪日団第３団の団員とホストファミリーの皆さん

日程後半では北海道へ移動し、まず北海道教育大学函館校で少子高齢化と労働者不足をテーマに学生と意見交換をし、その後七飯町に移動してホームステイを体験しました。

あるホストファミリーの方からは次のような感想をいただきました。

「松本清張の日本語の本を買いたいという要望や、納豆の味の違いがわかる等、日本の歴史、文学、音楽、映画、ドラマ、アニメの知識が想像以上で驚きました。好奇心と情熱溢れる若者との異文化交流は我が家にとって感動の連続で、短い滞在でしたが小学生の娘はお別れの朝、泣きながら登校していきました。最後にお別れのお手紙を交換するときには自分も涙ぐみました。」

続いて、世界一のこども園を目指す厚沢部町認定こども園「はぜる」を訪れました。保育園アワードで最優秀賞を受賞し、日本では最先端の施設と理念を持つ同園への「保育園留学」がコロナ禍の間に数々のメディアで紹介され、今やアメリカ、ドイツ、香港、シンガポールからも幼児が留学に来るほどです。海外からの視察は今回が初めてとのことで歓迎を受け、厚沢部町の行政担当者や主任保育士の方から、「はぜる」への熱い思いと共に様々な取り組みの説明を受けました。

子どもはもちろん、その親も保育士も幸福感に浸ることのできる保育園に内外から一家揃って数週間滞在してもらうことで地域経済も潤い、新たな雇用も生まれ、更には移住者の獲得にもつながる厚沢部町の取り組みに団員たちは強く惹かれたようで、数年後に自分の子どもと厚沢部町に保育園留学に来ると約束を交わして帰国の途につきました。

私ども基金は次年度の事業においても、日本人と韓国人が互いの社会や地域のホットな話題を紹介し合い、また日韓共通の課題や世界的な課題について語り合い、さらに日韓でどのような協力ができるのか等を考え、共同作業を行うといったプログラムの深化を目指します。そして、プログラムに携わってくださる全ての方々に喜んでいただけるよう、努める所存です。

最後に、今年度当基金の青少年交流事業にご参加・ご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

助成事業紹介

2023年度に実施された2つの事業を紹介します。

1 百済25代武寧王生誕祭並びに没後1500年記念行事

（まつろ・百済武寧王国際ネットワーク協議会）
6月3日～6月4日
佐賀県唐津市

まつろ・百済武寧王国際ネットワーク協議会は、佐賀県唐津市を拠点に日韓の市民交流を行っています。

市内の加唐島（かからしま）が朝鮮半島で４～７世紀頃に栄えた王国「百済」の第25代武寧王の生誕地とされる縁で、百済で２番目に王都が置かれた韓国・公州市との相互訪問交流を30年以上実施しています。

2023年が武寧王没後1500年にあたることから、２日間にわたり記念行事を盛大に行いました。韓国から訪れた関係者のほか、地元の唐津市民にも広く参加を呼びかけました。武寧王についてもっと関心を持ってもらえるようにと、講演や地元の高校生による発表などさまざまな催しを盛り込みました。

中でも韓国から招いた「熊津文化会」による武寧王誕生のエピソードを題材とした台詞のないノンバーバルパフォーマンスは、日韓の言葉の壁を越え、観客を魅了しました。「武寧王の生い立ちや加唐島とのつながりをよく理解することができた」「朝鮮半島との昔からのつながりを深く感じた」といった感想が多く聞かれました。

関係者の皆さんにとっては、新型コロナの影響で途絶えていた日韓の関係者同士の対面交流が再開できたこと、武寧王や韓国との交流について多くの市民に関心を持ってもらえたことが大きな収穫になったそうです。

９月には中学生２名を含む25名での公州市への訪問交流が実現しました。今後も地元の中学生や高校生など若い世代も取り込み、武寧王を縁とした韓国との市民交流が継続することが期待されます。

「武寧王の誕生の話」　武寧王誕生のシーン

2 立命館守山中学校中学生海外（公州市）派遣事業

（立命館守山中学校）
6月12日～6月16日
韓国・忠清南道公州市・公州師範大学附設中学校

立命館守山中学校（滋賀県守山市）は、グローバル教育の一環として、守山市と姉妹都市関係にある韓国・公州市の公州師範大学附設中学校との交流を2019年に開始し、同年に相互派遣事業を実施しました。

新型コロナ感染症の影響もあり、2020年から対面での交流が中断していましたが、４年ぶりに日本側生徒８名と引率教員１名の計９名が５日間の日程で韓国を訪れ、学校訪問やホームステイ、文化体験などを通じて交流が行われました。

６月12日、立命館守山中学校の生徒たちは、韓国到着後、公州市に移動。春からオンラインで交流を続けていた韓国側のバディ生徒と対面し、ホームステイを開始しました。翌13日には、公州師範大学附設中学校を訪れ、韓国の生徒たちと机を並べて、実際に英語や理科、音楽などの授業を受け、韓国での学校生活を体験しました。このほか、公州市滞在中には、市議会や市長への表敬訪問を行ったほか、市内にある博物館や韓国伝統家屋などを訪れ、歴史や文化に触れる体験も行いました。

訪韓プログラムに参加した生徒たちからは「国境を越えてかけがえのない友達ができた」「言葉が違っていても伝える気持ちがあれば伝わるということを実感できた」「日本と韓国で文化的な違いがたくさんあることに気づき、とても面白いと思った。他の国の文化についてもっと知識を身につけて、将来はたくさんの国の人とかかわりのあるような仕事につきたいと思った」などの声が聞かれました。

さらに、10月には韓国側から生徒たちが来日し、学校訪問やホームステイなどの交流プログラムが実施されました。今後も両校の交流のきずなが深まっていくことが期待されます。

理科の授業体験では、顕微鏡を使って韓国のお札の細部を観察しました

公州市内にある忠清道布政司門楼を訪れたほか、歴史や文化にも触れました

第23回日韓歴史家会議「歴史における戦争と文明」

日韓両国の歴史家26名の参加による、第23回日韓歴史家会議が2023年11月17日から3日間、韓国・ソウルにて開催されました。

この会議は、日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」とすることを目的として、2001年の第1回以来、日本史、韓国史のみならず、ヨーロッパ史、経済史など多様な分野を専門とする両国の歴史研究者が集い、最新の研究成果の報告とそれに基づく意見交換を行っています。

今回の会議は、2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻から着想を得た全体テーマのもと、戦争をめぐる総論的な議論と共に、近世東アジアの具体的な事例を歴史の中で検討し、2023年10月以降のパレスチナの状況についても触れるなど、活発な議論が交わされました。「世界史における戦争と文明」「前近代東アジアの中華体制における戦争と文明（中国と海洋文明）」「東アジアにおける冷戦・新冷戦と文明論」と題する3つのセッション別に日韓双方からの報告とこれに対する討論が行われました。

講演会の内容を含む今回の会議の報告書は、2024年3月末までに当基金ウェブサイト上で公開される予定です。

ソウル大学の会場で一堂に会した日韓双方の参加者

第23回日韓歴史家会議「歴史における戦争と文明」

■会議日程

◆11/17（金）
◇日韓歴史家会議開催記念講演会「歴史家の誕生」
韓国側／５世紀前半新羅と高句麗の交渉と平壌城
盧泰敦（ノ・テドン　ソウル大名誉教授）
日本側／「歴史家の誕生」私の植民地研究
永原陽子（京都大名誉教授）

◆11/18（土）
◇第１セッション
「世界史における戦争と文明」
司会：朴垣勇（パク・ウォンヨン　釜慶大）
報告：韓国側／西洋科学技術文明のヤヌス的両面性
―二度の世界大戦を中心に―
李来珠（イ・ネジュ　韓国軍事問題研究院、陸軍士官学校）
日本側／戦争は文明化したのか
―16 世紀から 20 世紀の戦争を考える―
佐々木真（駒澤大）
討論：日本側／田野大輔（甲南大）
韓国側／柳翰秀（リュ・ハンス　祥明大）
◇第２セッション
「前近代東アジアの中華体制における戦争と文明（中国と海洋文明）」
司会：金仙熙（キム・ソンヒ　建国大）
報告：韓国側／明・永楽帝のベトナム侵攻（1406-1407）と『明太宗実録』における記録の捏造
丘凡眞（グ・ボムジン　ソウル大）
日本側／避戦の枠組みとしての「鎖国」
池内敏（名古屋大）
討論：日本側／六反田豊（東京大）
韓国側／許芝銀（ホ・ジウン　西江大）
◇第３セッション
「東アジアにおける冷戦・新冷戦と文明論」
司会：金濟正（キム・ジェジョン　慶尚国立大）
報告：韓国側／朝鮮半島における冷戦・分断の長期持続
洪錫律（ホン・ソクリュル　誠信女子大）
日本側／第二次世界大戦後における賠償問題と東アジア冷戦体制―請求権と歴史認識問題の起源―
浅野豊美（早稲田大）
討論：日本側／金鉉洙（キム・ヒョンス　明治大）
韓国側／鄭秉峻（チョン・ビョンジュン　梨花女子大）

◆11/19（日）
◇第４セッション　総合討論
司会：都珍淳（ト・ジンスン　昌原大）

■参加者名簿（日本側）＊敬称略、五十音順

浅野 豊美	早稲田大学	東アジア国際関係史、国際和解学
飯島 渉	青山学院大学	医療社会史
池内 敏	名古屋大学	日本近世史、日朝関係史
伊藤 俊介	福島大学	朝鮮近代史、近代日朝関係史
小田中 直樹	東北大学	フランス社会経済史、歴史関連諸科学
金鉉洙	明治大学	近現代日韓関係史、在日朝鮮人運動史
佐々木 真	駒澤大学	近世ヨーロッパ史
田野 大輔	甲南大学	歴史社会学、ドイツ現代史、ナチズム研究
永原 陽子	京都大学	アフリカ史
宮嶋 博史	成均館大学校	朝鮮史
六反田 豊	東京大学	朝鮮中世・近世史

■参加者名簿（韓国側）＊敬称略、カナダラ順

丘凡眞	ソウル大学	中国近世史
金仙熙	建国大学	日本近世史
金濟正	慶尚国立大学	韓国近現代史
盧泰敦	ソウル大学	韓国古代史
都珍淳	昌原大学	韓国近現代史
柳翰秀	祥明大学	西洋近代史
朴垣勇	釜慶大学	西洋近現代史
朴薫	ソウル大学	日本近代史
裴京漢	釜山大学	中国近代史
李先敏	ソウル大学	韓国近現代史
李来珠	韓国軍事問題研究院、陸軍士官学校	西洋近代史
林炳徹	韓国教員大学	西洋近代史
鄭秉峻	梨花女子大学	韓国近現代史
許芝銀	西江大学	日本近世史
洪錫律	誠信女子大学	韓国現代史

フェロー
研究紹介

17～19世紀名古屋地域民の朝鮮認識
― 名古屋で流通した朝鮮関連書籍を中心に ―

西江大学研究教授　**許芝銀**（ホ・ジウン）

日韓文化交流基金の訪日フェローシップを通じて筆者は江戸時代に名古屋で流通した朝鮮関連書籍を調査し、17世紀から19世紀の名古屋地域民の朝鮮認識の把握を試みた。

名古屋は江戸時代、尾張藩の城下町であった。藩主は徳川御三家の筆頭格だった尾張徳川家で、数ある大名の中でも最も高い家格を誇っていた。領地の規模も御三家の中で最も広く、尾張国の名古屋城を居城とした。

名古屋地域は城下町という特性上、武士が運営する手習塾(寺子屋)が多く、主に読み書きを中心に教育を行った。また、地域における出版の拠点として多くの往来物が出版された。

往来物は11世紀から19世紀にかけ、日本で子供たちの教育のために広く使われていた教材である。16世紀から17世紀には古往来物が多く出版される中で刊行本として大量に広まり、以後、往来物の新刊書出版が著しく増加した。18世紀から19世紀には家庭や商家、そして社会的需要に応じて飛躍的に増加した手習塾でいずれも往来物が教材として使用された。

名古屋地域の住民は、児童期に手習塾での往来物を教材とした教育を通じ、文字を読み書きする能力を身につけ、その能力を基に成人した後、自然に文字文化の世界に入ることができた。

一方、江戸時代の名古屋では藩主や寺、神社が集めた書籍を保管していた蓬左文庫や大須文庫、吉見文庫のほか、個人が収集した書籍を保管していた吏隠亨書庫、文解書庫、平出文庫、一葉文庫などがあった。中でも蓬左文庫の蔵書には朝鮮関連の書籍が多数所蔵されている。

名古屋は朝鮮から江戸幕府に派遣された通信使が往来時に通過する地域の一つでもあった。周知の通り、朝鮮通信使が日本を訪問した際、日本人は大きな関心を示し、それが朝鮮関連書籍の執筆と流通につながった。名古屋地域も例外ではなく、通信使を近くで見たり、応接する過程で直に接したりすることができた住民たちは朝鮮に対して関心を持つようになり、その結果名古屋では多くの朝鮮関連書籍が製作され流通した。

代表的なものとして、名古屋で製作･流通された朝鮮関連の往来物である『各国産物往来』、名古屋武士の朝日文左衛門が残した日記である『鸚鵡籠中記』、名古屋で流通していた『異国往来並漂流年表 二編』は名古屋地域の人々がどのような朝鮮関連知識を得、またどのような分野に関心を持ったのかを知ることができる書籍である。

『各国産物往来』は1873年に鈴木吉兵衛が名古屋で出版した書籍で、鈴木が原撰、日比野綱雄が刪補を行い、挿絵なしで当時の貿易品を各国別に紹介した往来物である。各国の国名や地域名と共に貿易品が列挙されているが、朝鮮は国名の次に産物として高麗人参、錫、鉄、米が列挙されている。

『鸚鵡籠中記』は1711年10月5日の朝鮮通信使の名古屋訪問を前に、尾張藩の中級武士･朝日文左衛門重章が残した日記である。ここでは通信使に関する内容のみならず、彼らに対する諸般の接待状況、通信使一行を見物するために集まった名古屋地域や近隣地域の住民の姿が描かれている。

特に蓬左文庫所蔵の『異国往来並漂流年表 二編』は、管見では現在まで学界でとりあげられたことがない。内容は日本と過去朝鮮半島にあった王朝との関係が分かる主要な事件を中心に記録されているのみならず、琉球や、オランダをはじめとする西洋諸国に関する内容も含まれており、江戸時代の日本人の対外認識をうかがい知ることができる。

このように名古屋地域の住民は手習塾での往来物を教材にした教育を通じて文字を読み書きする能力を備えるようになり、名古屋で製作され流通した朝鮮関連書籍を通じて朝鮮に関する情報を得て、朝鮮に対する認識を形成したことがわかるのである。

『異国往来並漂流年表 二編』(蓬左文庫所蔵本)の表紙と本文
(写真提供：名古屋市博物館)

プロフィール

許芝銀（ホ・ジウン）

西江大学史学科で博士号取得(東洋史専攻)。近世日本史および日朝関係史を主に研究している。現在、西江大学デジタル歴史研究所の研究教授。
著書として『倭館の朝鮮語通詞と情報流通』、共訳書として『竹嶋紀事』、論文として「『琉球往来』と琉球関連知識･情報の流通」、「17～19世紀の朝鮮関連の往来物と情報の流通」などがある。

2023年１月から12月までの事業について報告します。

1 青少年交流事業（JENESYS事業）

訪日団

団体名	属性	人数	期間	テーマ・訪問地・訪問校
2022年度 韓国青年訪日団（第２～４団）	大学生	123	1/13～19	「防災ツーリズム～東日本大震災被災地復興視察」（宮城県、岩手県ほか） 城西国際大学、獨協大学、法政大学
韓国青年訪日団（第５～７団）	高校生	108	2/19～25	「SDGs～もったいない文化（食品ロスと環境問題）」（大阪府、兵庫県ほか）
2023年度 日韓学術文化交流事業訪日団（第１～２団）	社会人	52	6/4～10	「日本の教育現場及び平和教育の現場視察」（東京都、広島県、兵庫県、大阪府）　東京都江東区立八名川小学校、東京都立小石川中等教育学校、広島市立袋町小学校、学校法人呉武田学園　武田高等学校
韓国大学生訪日団（第１～２団）	大学生	80	6/25～7/1	「日本の平和への取り組みと日韓交流」（東京都、長崎県、佐賀県ほか） フェリス女学院大学、昭和女子大学、長崎大学、長崎外国語大学
韓国青年訪日団（第１団）	大学生	30	7/11～19	「日本のSDGsへの取組事例視察（サステナブル・ツーリズムと地域活性化）」（東京都、埼玉県、岩手県、宮城県）　大東文化大学
韓国青年訪日団（第２団）	高校生	30	7/25～8/2	「日本の防災対策（長野県飯田市の事例）」（東京都、長野県、愛知県） 長野県飯田風越高等学校
韓国青年訪日団（第３団）	社会人 大学生	9	9/21～10/5	「日韓交流おまつり2023 in Tokyo」参加及びポストコロナの地域再生事例（東京都、北海道）北海道教育大学　函館校
韓国高校生訪日団（第１～２団）	高校生	71	10/22～28	「日韓交流とSDGｓ」（東京都、富山県、石川県、福井県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、徳島県） 立命館守山中学校・高等学校、徳島県立城ノ内中等教育学校、富山国際大学付属高等学校、福井県立福井商業高等学校
外務省外交部相互派遣大学生訪日団	大学生	29	10/31～11/8	「グローバル課題の解決に向けた日韓協力」（東京都、埼玉県、大阪府、広島県）　埼玉女子短期大学
アジア国際子ども映画祭訪日団	高校生	10	12/15～21	第16回アジア国際子ども映画祭参加（大阪府、兵庫県、徳島県） 蒼開中学校・高等学校

訪韓団

団体名	属性	人数	期間	テーマ・訪問地・訪問校
日韓学術文化交流事業訪韓団	社会人	31	8/20～26	「韓国文化の過去と現在、及び韓国の教育現場の理解」（ソウル特別市、京畿道）　ソウル工業高等学校、ソウル大林小学校、徳成女子大学
外務省外交部相互派遣大学生訪韓団	大学生	30	9/11～19	「グローバル課題の解決に向けた日韓協力」（ソウル特別市、江原特別自治道）　ソウル大学日本研究所
高校生訪韓団（第１～２団）	高校生	70	11/5～11	「日韓交流と韓国の現状理解」（ソウル特別市、京畿道、忠清北道） 城南外国語高等学校、清明高等学校、高麗大学

日韓学術文化交流事業訪日団（第１団）
広島市立袋町小学校訪問

韓国大学生訪日団（第２団）
昭和女子大学訪問

外務省外交部相互派遣大学生訪韓団
ホストファミリーと対面

高校生訪韓団（第１～２団）高麗大学訪問
訪韓団OBとの対話

2 フェローシップ・助成事業

1 2023年度訪日・訪韓フェローシップ採用者決定

2023年度訪日・訪韓研究支援（フェローシップ）には１次・２次募集合わせて35名（訪日25名、訪韓10名）の応募があり、審査の結果、17名（訪日13名、訪韓４名）の採用を決定しました。

2 2023年度人物交流助成対象事業決定

a. 2023年度人物交流助成には42件の申請があり、この中から27件への助成が決定しました。

事業名称	申請団体
第９次 21世紀の朝鮮通信使 ソウル～東京 友情ウォーク	21世紀の朝鮮通信使　友情ウォークの会
烏鵲橋プロジェクト	FUTURE EMOTION
FICS 2023夏 ソウル・東京セッション	FICS 東京大学
日韓リーディングワークショップ（韓国出張版）	一般社団法人フリンジシアターアソシエーション
オウルリム芸術団招聘公演事業	認定特定非営利活動法人日本車椅子レクダンス協会
第15回福岡インディペンデント映画祭2023	福岡インディペンデント映画祭実行委員会
令和５年度韓国世宗大聖高等学校交流事業	三重県立津商業高等学校
共通の課題解決のための日韓大学生によるセミナー	山形大学　高吉嬉研究室
宗像CSR日韓環境国際交流	宗像CSR推進実行委員会
日韓生涯スポーツ交流事業 －マスターズ陸上交流を通して社会貢献を目指す－	国民生活体育大邱広域市達西区陸上競技連盟
2023東アジア国際シンポジウム	一般財団法人東アジア総合研究所
百済25代武寧王生誕祭並びに没後1500年記念行事	まつろ・百済武寧王国際ネットワーク協議会
立命館守山中学校中学生海外（公州市）派遣事業	立命館守山中学校
East Asia Theater Interaction in Busan 舞台芸術交流プログラム	East Asia Theater Interaction 実行委員会
日韓交流事業現代演劇企画 THEATRE ATMAN 第12回公演「記憶の部屋」日韓文化交流会	THEATRE ATMAN
日韓青少年交流訪韓団	日韓親善協会中央会
青少年日韓音楽交流会	SPIELRAUM
第39回日韓学生フォーラム	第39回日韓学生フォーラム
International Business Contest （IBC）	OVAL KOREA
日韓文化スポーツ交流会’23	一般社団法人九州スポーツ振興支援会
「平和のリボン」障がい者アーティストと健常者アーティストによる日韓音楽プロジェクト	アンサンブルメゾン
第2回セラプレイウィーク「子どもの眼で世界を見る実践探求」	特定非営利活動法人日本セラプレイ協会
「日韓交流おまつり2023 in Seoul」岩崎鬼剣舞　派遣事業	岩崎鬼剣舞保存会
「日韓交流おまつり2023 in Seoul」SAKURA J SOUNDS 派遣事業	ハートツリー株式会社
対馬の歴史と文化と自然を知る日韓ユース・ワークショップ2023	朝鮮文化財ワークショップ実行委員会
日韓政治思想学会　第16回国際共同学術会議	政治思想学会
2023静岡・釜山新朝鮮通信使友好事業「～交流の足跡をたどり、未来をともに描こう～」	一般財団法人静岡市国際交流協会

b. 創立40周年記念事業として、助成事業の枠組みの中で「地域の特性を活かした日韓交流」「大学生・高校生や若手社会人の日韓交流」をテーマとした事業を募集しました。15件の申請があり、この中から８件への助成が決定しました。

事業名称	申請団体
令和５年度日韓青少年対話型交流事業「日韓みらいファクトリーアワード2023」	日韓みらいファクトリーアワード実行委員会
2023年度 日韓親善中学生国際交流オールスター戦	一般財団法人日本リトルシニア中学硬式野球協会関西連盟中国支部
大学生による日韓青少年スポーツ交流事業	福岡大学
日韓精神障害者交流事業2023	一般社団法人精神障害当事者会ポルケ
日韓協働環境平和フォーラム2023	慶南青年カレッジ実行委員会
第５回日韓友好のつどいin oita	特定非営利活動法人日韓芸術文化交流会
日韓市民活動未来フォーラム「市民活動と市民自治の役割と未来に向けて」	特定非営利活動法人市民セクターよこはま
パワーアップ　プロジェクト　～交流・体験・発信～	TANAKAMIこども環境クラブ

3 2023年度学術定期刊行物助成

■ 韓国朝鮮の文化と社会　第22号（韓国・朝鮮文化研究会編、2023.10）
■ 現代韓国朝鮮研究　第23号（現代韓国朝鮮学会編、2023.11）

3 日韓文化交流基金賛助会員制度

公益財団法人日韓文化交流基金では、賛助会員制度を設けており、現在も多くのご支援を賜っています。心より感謝申し上げます。

賛助会員の皆さまからいただいた会費は、助成事業などを通じて日韓間の文化交流に活用しています。詳しくはウェブサイトにてご案内していますので、ご関心をお寄せくださいますと幸いです。

賛助会員リスト

（2023年有効会員、五十音順、敬称略。カッコ内の数字は２口以上の口数）

特別会員（６名）

小野正昭(3)　鹿取克章(3)　金春美(3)
古賀信行(3)　中江新(5)　渡辺浩(3)

個人会員（50名）

青野正明　阿部孝哉　安部誠　飯島渉　石川武敏
磯崎典世　稲葉真岐子　林在圭　内田富夫(2)
及川俊男　大竹洋子　菅野修一　姜英淑
木畑洋一　小林直人　小針進　高麗文康
坂井俊樹　阪田恭代　酒勾康裕　櫻井浩
佐藤俊行　鮫島章男(2)　澤岡泰子　宍戸秀行
上保敏　白川豊　シン･ジュンヨン　高田加代子
田中正敬　塚本壮一　陽清学園津谷正毅　都恩珍
永井哲　中塚明　西澤豊　波田野節子
墨の美術館濱﨑道子　日本民藝館館長深澤直人
福原裕二　藤田昭造　藤本幸夫　堀泰三　馬定延
前田二生　松井貞夫(2)　實生泰介　茂木敏夫
余田幸夫　和田とも美

法人会員（１団体）

和光物産株式会社(5)

4 第36回日韓文化交流基金代表訪韓団

当基金の古賀会長をはじめ、 理事・評議員から構成される代表訪韓団が、2023年４月18日から20日までの３日間の日程で韓国を訪問しました。

ポストコロナを見据えた日韓交流の発展を目指し、韓国の要人や諸機関の関係者と懇談して活発な意見の交換を行いました。

韓国外交部朴振（パク・ジン）長官への表敬訪問

5 日韓交流おまつり2023 in Tokyo参加

コロナ禍でのオンライン開催を経て４年ぶりに対面式で開催された「日韓交流おまつり2023 in Tokyo」（９月30日・10月１日：於　駒沢オリンピック公園）に参加しました。当基金が出展した『韓国の若者と語ろう』と『高句麗古代装束試着体験』の両ブース、また書家・濱﨑道子先生による書道パフォーマンスには、二日間であわせて1000名を超える来場者がありました。

〔協力〕高麗神社、一般社団法人高麗1300、墨の美術館、JKAF（当基金大学生訪韓団OBOG組織）

なお、11ページにブース運営を担当したJKAFメンバーによる活動報告を掲載しています。

6 理事会・評議員会・役員人事

① ３月24日に第98回理事会が開催され、令和５年度予算案が承認されました。
② ６月26日に令和５年度定時評議員会が開催され、令和４年度の決算が承認されました。
③ ９月19日の令和５年度第１回臨時評議員会にて、以下の人事が承認されました。
　就任／理事：佐々木聖子（入管協会業務執行理事）

40th anniversary

公益財団法人
日韓文化交流基金40周年

おかげさまで基金設立40周年を迎えました。

1983年に生まれた公益財団法人 日韓文化交流基金は、
おかげさまで40周年を迎えました。
ともに歩んでくださった皆様への感謝の思いを胸に
次の10年、さらに次の10年に向かって歩み続けてまいります。

公益財団法人 日韓文化交流基金
〒101-0061
東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2 プライム水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790 fax. 03-6261-6780

Web　Facebook　X (旧 Twitter)